

53 民間急救療法

○谷津 三雄・渋谷 鉞

救急蘇生法は、その性質からして医術の最初に必要に迫られて生じたものであることは想像に難くない。特に、古医書にみられる救急方書の多くは、今日の救急法書的な内容のほかに疼痛・麻痺に対し鍼灸を中心としたペインコントロールも記載されていて、まさに今日でいうプライマリ・ケアのルーツとも考えられる。したがって、救急蘇生法史の研究は、医学史の研究においても極めて重要である。

演者らの一人谷津はわが国の救急蘇生法史に関する研究の一端として、救急法、特に呼吸吹き込み法の一端を昭和四十年の第六十六回日本医史学会において発表した。今回、廣瀬元周譯述、民間急救療法、時習堂蔵版、明治二年刊、上巻二十八丁、下巻二十三丁（本文十五丁、

藥劑五丁、付図三丁）十五・〇×十七・五センチメートル、和中本、かな漢字交じり本を資料として、その内容について発表する。

上巻の凡例に「此書原西洋諸書中ヨリ急症ヲ救助スルニ枢要ナル方術ヲ抄譯シ且ツ之ニ加フルニ自ラ試験シテ効ヲ取ル所ヲ編次セル者ニシテ民間貴賤ノ別ナク常ニ銘記シテ醫治ヲ乞フニ違ナク危急ニ臨デ患者ヲ救助スベキ手段ノ大體ヲ揭示ス因テ急救療法ト題ス其全治法ノ如キハ此書ノ目スル所ニ非ス」とあり、本書は「救急」ではなく「急救」と書かれ「危急ニ臨デ患者ヲ救助ス：因テ急救療法ト題ス」とある点、特異的である。なお、本書の原本が何であるかは、凡例から明らかにすることができなかつた。

目次から上巻の内容をみると「刀傷、打傷、湯火傷、溺死、凍死、餓死、縊死、食物哽喉、竹本刺、咬傷、小蟲入耳」、下巻は「中毒、霍乱、卒中、癩癩、昏冒、衄血、咯血、吐血、下血」からなっている。「溺死」の項に「人水ニ溺スルトキハ水気管ニ迫テ呼吸通セス血液流行セスノ死スルナリ断ノ水ヲ吞デ死スルニ非ズ：切ニ倒置シテ

吐水セシメント欲スルコト勿レ蓋シ溺者未ダ死セザルト
キハ気管口緊閉シノ水一滴モ肺中ニ入ル者ニアラズ」と

病態生理にも触れていることは、今までの救急法書にみ

られない高度な記載である。なお、溺水者の救急法につ

いて次の諸法が記されている。「(一) 少々頭部ヲ低クメ

胸肋ヲ圧迫スレバ盡ク停水ヲ咯出シ呼吸通ス、(二) 溺者

ノ鼻孔ヲ塞キ口ヲ以テ溺者ノ口ニ吻合シ氣ヲ吹キ入ル

コト数次呼吸ヲシテ挑起セシム、(三) 烟草ノ烟ヲ肛門ニ

吹き入ルノ法、(四) 鍼術灸療モ亦タ試ミ用ユベキナリ」

すなわち、(一) は今日の用手的人工呼吸法、(二) は口

対口の人工呼吸、(三) になると今日では理解に苦しむ。

凡例に「民間貴賤ノ別ナク」とか「空ク手ヲ束ネテ医

者ノ来診ヲ待ツ若シ醫ノ来訪時刻ヲ移ストキハ終ニ救フ

コト能ハザルニ至ル」とありながら、また、本書は「民

間」と書かれていながら、挿図には彎針、金創鍼、微彎

針、直針、側瘡子、剪刀、鑷子、鑷子又式、柳葉鍼、披

鍼、玻璃水鏡、篋、止血機などの外科の器具が図番号な

しで記載されている。第一図から第十五図と番号がふら

れた図は第一図から第十二図が縫合法、第十三図が弾丸

鉗、第十四図が胃洗滌、第十五図が鼻出血に対するペロ
ックタンポンと手術法が記されている。

(日本大学松戸歯学部)